

基礎セミナー「他人について調べて書く 技法を身につける」の実践

体験型学習をめざして

近 田 政 博

<要 旨>

筆者は平成15年度後期に文系基礎セミナーを担当し、「他人について調べて書く技法を身につける」と称してインタビュー実習を伴う体験型授業を行った。インタビューの基本を身につけることを通して、社会における人間関係スキルの重要性に気づいてもらうことがねらいである。

授業の進め方は、①教科書に用いた立花隆ゼミ編『二十歳のころ』に掲載されたインタビュー記録をレビューする、②インタビューの方法論と基本スキルを抽出する、③インタビュー計画を立てる、④インタビューの実施、⑤インタビュー記録の作成と発表、⑥期末コメント(半年間の相互評価と自己評価)という順序であった。

結果的には、本授業は学生の授業評価アンケートにおいて例年になく高い評価結果が得られた。その要因として考えられるのは、①新入生の学習ニーズに適したテーマ設定を行ったこと、②インタビューの実践という体験型の課題を課したこと、③課題を達成するのに適した教科書を選んだこと、④課題達成のプロセスと成果を全員で共有したこと、などである。

このような体験型学習において重要なことは、仲間と体験を楽しむことだけでなく、体験を通して何を学ぶことができるのかを明確にすることである。そのためには、体験活動が依拠する理論モデルや概念を教師が事前に準備しておくことが求められる。こうした体験型授業の事例を教養教育段階において普及・蓄積することは、新入生が大学での学習に適応する上での重要な鍵になると思われる。

本稿では、筆者が平成15年度後期に担当した文系基礎セミナーで試みた体験型授業「他人について調べて書く技法を身につける」の実践内容とその成果について振り返る。また、筆者が過去に担当してきた基礎セミナーと比較して、本授業に対する受講生の満足度は、授業評価アンケート結果をみる限り非常に高かった。こうした結果が得られた要因について検討する。最後に、本授業のような体験型のセミナーにとって重要な要素は何かについて考えてみたい。

1. 基礎セミナーに求められるもの

基礎セミナーは、平成15年度から導入されている新カリキュラムにおいて全学基礎科目の一つとして位置づけられている。全学基礎科目は「初年次生を大学教育に導入し、自立した学習能力を身につけるとともに、文・理に共通した基礎的学力や技能を養う科目」であり、基礎セミナーの他に言語文化科目、健康・スポーツ科学科目がある。いわば本学の全学基礎科目は、あらゆる分野の学生に受講が義務づけられているという意味で、国際的に言われている「コア・カリキュラム」に相当すると思われる。全学基礎科目は1年次からの受講が必修となっている。

基礎セミナーの科目目標は『全学教育科目履修の手引き』の中に詳細に示されている。具体的な目標を箇条書きにすると、次のようになる。

- ・ コモンベーシックとしての「読み、書き、話す」を中心とした多面的なトレーニングを通して、「知の探求プロセス」を「学問のおもしろさ」を学ばせ、自立的学習能力を育成する
- ・ 未知の事象や問題に対する探求心、創造性を養い、問題解決能力、発表能力、討論能力などの基礎的能力を身につけ、同時に、専門科目学習への準備を整える
- ・ 問題について多様な考え方や解答がありうることを知る
- ・ 自分の考えを他の人に問いかけることによって検証したり、学生間でお互いに啓発し合って学ぶことの意義を理解する
- ・ 教員、TA(ティーチング・アシスタント)、他の学生との共同作業を通じた人間的な交流を経験する

ここに挙げられているキーワードは、「自立的学習能力」「探求心」「創造性」「多様性」「相互啓発」「人間的交流」「学問のおもしろさ」といった、いずれもかなり抽象度の高い概念である。アメリカの教育心理学者ブルー

ム(B.S.B1oom)は認知的領域、情意的領域、精神運動的領域という3領域に対応した学習目標(それぞれ知識、態度、技能が相当する)を設定している¹⁾。これに即して言えば、本学の基礎セミナーに求められているのは各ディシプリンに依存する体系的な知識ではなく、「大学で学ぶとはどういうことか」「どのように学んだらよいか」という学習態度の形成および大学での学習に不可欠な基礎的技能である。ブルームの分類に即して言えば情意的領域が重要となる。これらは、問題とは与えられるものであり、一つだけしか存在しない解を発見することを求められた高校までの学習ではあまり意識することのなかった目標概念であろう。大学での学習生活をスタートする上で、まずはこの重要性に気づいてほしいというカリキュラム上の意図が推察される。

2. 授業の目標・シラバス

2.1 目標

筆者がこの授業の目標に設定したのは、他人について調べて書く技法を身につけることである。これはすなわち、インタビューの基本スキルを習得することであり、他者の意見を引き出し、受容し、批判的に検討し、記録し、発表するというプロセスを通して、大人の他者とどのようにしたら信頼できる人間関係を築くことができるかについて学ぶことを目的とした。インタビューで聞き出すことは、①なぜ今の職業を選んだのか、②現在から振り返って大学時代に学んでおくべきことは何か、の2点である。筆者はこの基礎セミナーのクラスを通年で担当しており、前期では「自分自身についてのプレゼンテーション」をテーマとした授業を行っている。具体的には、①大学に入学するまでの生い立ち、②自分の人格形成に最も影響を与えた人と本、③大学時代に何を学びたいかの3点をソフトウェア「パワーポイント」を用いて魅力的に表現することを要求した。そのために、プレゼンテーションの方法論をテキストから学び、自分自身の人生記録(アルバム、日記など)を振り返ってもらうなどの作業を行った。

すなわち、前期ではこれまで歩んできた人生について自分自身を振り返り発表するという「内から外にむけてのアプローチ」をとったのに対して、後期では他者に接触してその人生経験を聞き出し、記録(内面化)するという「外から内に向けてのアプローチ」をとった。その際に留意したことは、自己プレゼンテーションやインタビューといった具体的なスキルの獲得と

並行して、自分自身の過去を人前に公開するという体験、および年長者の人生経験を聞き出すという体験を受講生にさせることである。こうした教室外での体験学習に取り組むことを通して、①自分と他者との関係性について考えさせ、②大学での学習課題に主体的に取り組む姿勢を身につけることを最終的なねらいとした(図1参照)。

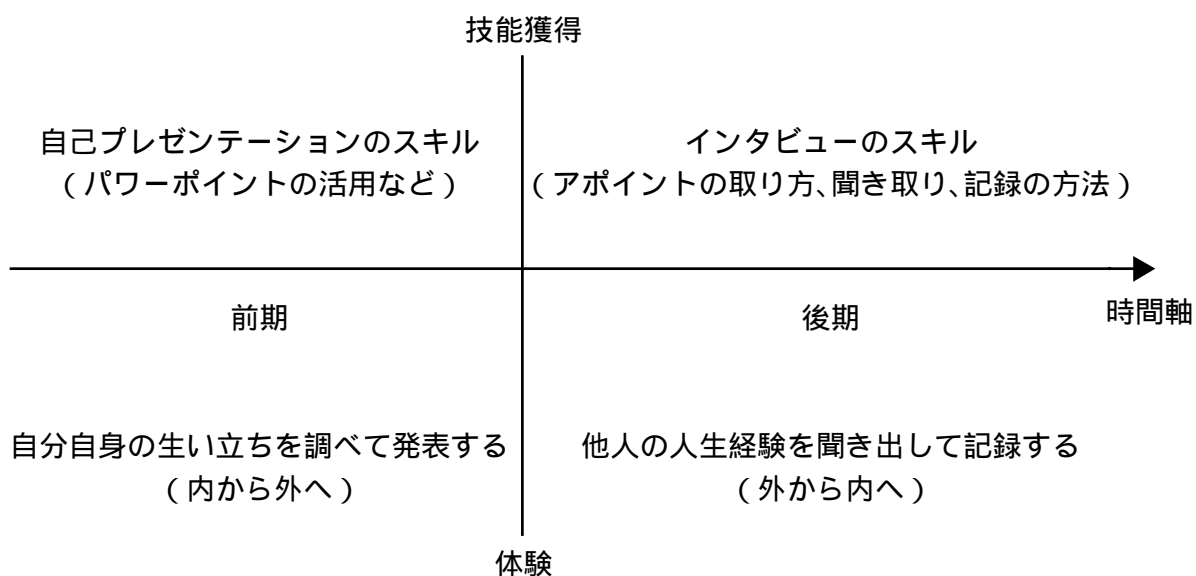


図1 平成15年度基礎セミナーの目標設定

2.2 シラバス・授業計画

この授業の詳細なシラバスは、高等教育研究センターが2001年に開発したオンラインのシラバス拡張ツールである「ゴーイングシラバス²⁾」に掲載すると同時に、初回の授業時に紙で配布して説明を行った。シラバスには、授業の目標、教科書、成績評価の方法、履修条件などの情報に加えて、毎回の授業内の学習活動と当目の授業までに行う学習活動(宿題)を記載した授業計画が含まれている(図2参照)。授業計画を最初に示すことは、学生にとっては履修上の道しるべになり、教師にとっても当初の目的から授業内容が逸脱してしまうことを予防する効果が期待できる。

基礎セミナー「他人について調べて書く技法を身につける」の実践

日付	授業内の学習活動	当日の授業までに行う学習活動
10月14日	・前時の反省点を振り返る ・なぜ二十歳のころを振り返り上げるのか ・なぜインタビューをやするのか(調べて、書くという作業をするのに意欲を高めるため)	・教科書を購入しておく
10月21日	・『二十歳のころ』の中で、どのインタビュー事例をインタビューするか決める(1人2件) ・チームを編成する(2人1組(全部で8組)) ・チームごとに、最終的に誰をどんなインタビューしたいかを相談しよう	・自分がインタビューしたいインタビュー事例いくつかを選んでおく
10月28日	・シドゥー4件分(1回目) 15分×4件+意見交換30分 インタビューの事例から調査技法を学ぶ	・シドゥーを作成する(1冊につきA4で1枚におさめる)何を聞くか、どのように聞くか、どのくらい聞くか、どんな反応が返ってきたか、相手の表情や気持が、ちゃんと書けているか、このインタビューは成功しているか
11月4日	・シドゥー4件分(1回目) 15分×4件+意見交換30分 インタビューの事例から調査技法を学ぶ	同上
11月11日	・シドゥー4件分(1回目) 15分×4件+意見交換30分 インタビューの事例から調査技法を学ぶ	同上
11月18日	・シドゥー4件分(2回目) 15分×4件+意見交換30分 インタビューの事例から調査技法を学ぶ	同上
11月25日	・シドゥー4件分(2回目) 15分×4件+意見交換30分 インタビューの事例から調査技法を学ぶ	同上
12月2日	・シドゥー4件分(2回目) 15分×4件+意見交換30分 インタビューの事例から調査技法を学ぶ	同上
12月9日	・インタビュー計画① 15分×3チーム+意見交換30分 ×実行可能かどうか、意欲が足りそうかどうか	・インタビュー計画を作成し、伺い、どうやって聞くのか、どのように記録するのか
12月16日	・インタビュー計画② 15分×3チーム+意見交換30分 ×実行可能かどうか、意欲が足りそうかどうか	同上
1月13日	・インタビュー結果① 10分×3チーム+意見交換30分 ×計画通りにできた部分とできなかった部分	・インタビュー結果のレポート作成(インタビュー記録+反省点)
1月20日	・インタビュー結果② 10分×3チーム+意見交換30分 ×計画通りにできた部分とできなかった部分	同上
1月27日	・インタビュー結果の総括 インタビュー結果発表の反省点 他グループの発表への感想 この授業で何を学んだか	結果発表の反省点および他グループの発表への感想をA4で1枚におさめておく

図2 シラバスで配布した授業計画(「ゴーイングシラバス」より)

2.3 教科書

教科書には、評論家の立花隆が1996～98年に東京大学教養学部で開講していた「調べて書く」というゼミの記録である『二十歳のころ』を用いた³⁾。立花氏のゼミでは、有名人から無名人まで、その人の二十歳の頃のことをインタビューし、人生において二十歳の頃がもつ意味を考えることを目的としている。立花ゼミの受講生たちはグループ単位でインタビュー計画を立て、相手と交渉し、インタビューを実行し、さまざまな手法を用いて記録に残している。インタビューの技法に関するテキストは他にもあるが、学生による社会人へのインタビュー結果をケーススタディとして学ぶには、同書が最も適切であると判断した。

ところで、立花はなぜこのテーマを選んだのか。その理由について彼は同書の中で「多くの学生にとって、調べることと書くことがこれからの一

生の生活の中で、最も重要とされる知的能力だからである。調べることと書くことは、もっぱら私のようなジャーナリストにだけ必要とされる能力ではなく、現代社会においては、ほとんどあらゆる知的職業において、一生の間必要とされる能力である。ジャーナリストであろうと、官僚であろうと、ビジネスマンであろうと、研究職、法律職、教育職などの知的労働者であろうと、大学を出てからつきたい職業生活のかなりの部分が、調べることと書くことに費やされているはずである。近代社会は、あらゆる側面において、基本的に文書化されることで組織されているからである⁴⁾と述べている。

そして人に直接会って話を聞くという体験の持つ意味について、立花ゼミ受講生の一人は次のように述懐している。「『話を聞く』というのは、相槌を挟みながら頷いて聞くという意味ではない。言葉ひとつひとつから、相手の言いたいこと、言いたくないこと、過去と現在を読み取り、その情報をもとに自分の中にその人の像を結ぼうとする作業だ。⁵⁾したがって、本セミナーの学生にとっては、『二十歳のころ』は単なる教科書ではなく、自分たちがこれからチャレンジする行動のベンチマーク(達成基準)となった。

2.4 成績評価の方法

成績評価の方法では二つの点に留意した。一つは、発表時のみならず毎回の授業への参加態度など形成的評価を行うことであり⁶⁾、もう一つは評価方法だけでなくその合格基準も示すことである。評価方法は次のように行った。

- | | |
|------------------------------------|-----|
| ・毎回の授業に積極的に参加したか | 5点 |
| ・インタビューの技法をどのくらい獲得したか | 5点 |
| ・インタビューの内容がどのくらい充実していたか | 10点 |
| ・インタビュー結果に対する他の学生の評価 | 5点 |
| ・期末レポート「インタビューの反省点と他グループ発表への感想」の内容 | 5点 |

合計30点満点とし、25点以上：優、20点以上：良、15点以上：可、14点以下：不可の絶対評価とした。うち、20点はインタビュー記録の発表方法・内容についての評価であり、うち5点分を学生間の相互評価とした。インタビューは二人一組で行ったので、30点中の20点分は同じ点数がつくこ

とになる。成績評価においてもチームワークが大きく左右することを学生に説明した。

これと別に、毎回の授業参加への積極度を5点、期末レポートを5点として合計した。シラバス説明時に絶対評価を行うことを伝えると同時に、「この授業はみなさんを不合格にするためにやるわけではない。できれば全員優をとってほしい。もし良や可だったとしたら、それは大変不名誉で屈辱的なことだと思ってほしい」というメッセージを添えた。

3. 授業のプロセス

本授業のプロセスは次の6段階からなる。

- ①『二十歳のころ』に掲載されたインタビュー記録を1人2本ずつレビュー(批評)する。レビュー項目は、インタビューの方法(どう聞いて、どうまとめ、どう記録しているか)、インタビューの成果(期待通りの成果が挙げられているか)、学生自身の感想の3点(10月～12月初旬)
- ②インタビューの方法論と基本スキルの抽出(11月～12月初旬)
- ③インタビュー計画(誰に、何を、どうやって聞くのか、どう記録するか)(12月中旬)
- ④インタビューの実施、記録の作成(12月中旬～1月上旬)
- ⑤インタビュー結果の発表(インタビュー記録と反省点)(1月)
- ⑥期末コメント：半年間の相互評価と自己評価(最終回)

①の『二十歳のころ』のレビューは、受講生が自分自身のインタビューを構想する上でのレディネスを高めるねらいをもっている。事前にどのような準備がなされているか、最初の導入をどうやって行っているか、質問の内容・順番は適切か、相手の回答が思いもかけない方法に逸れていった場合にどのように対処しているか、記録したインタビュー内容をどのように記録・再現しているかなど、第三者の目から批判的に検討してもらい、インタビュー手法のティップス化を試みた。こうしたいわゆるクリティカル・シンキング(critical thinking)の思考法はそれだけを切り離して行っても習得するのは容易でないが、体験学習の中に関連づけることで効果をあげられるのではないかと考えた。この時点で抽出できたインタビューのティップスにはたとえば次のようなものがある。

- ・よいインタビューには十分な準備が欠かせない
- ・事実を聞いてから意見を聞く方がスムーズに話を展開してもらえる

- ・インタビューを行う側と受ける側の文化的背景が異なると、思わぬ誤解を生じる場合がある
- ・相手がどうしても聞かれないことは事前に察知しておく

②のインタビューの方法論については、『二十歳のころ』のレビューと並行して、筆者がレクチャーを行った。基本的な方法論は、次の3点である。

1) 誰にインタビューするか(インタビューする価値がありそうか、どうしてその人を選んだのか、実現可能性、アポイントの取り方、事前の調査・資料収集方法、その他の留意点など)

2) 何について、どうやって聞くのか(何を聞くのか、どのくらい聞くのか、どうやって聞くのか、聞き手の役割分担、録音するのかなど)、導入の方法、締めの方法、インタビュー直後の反省、お礼状の作成など)

3) どうやって記録するか(一人称、二人称、三人称などの形式、テープおこし、編集ミーティング、発表の形式、インタビューによって何がわかったか、インタビュー記録をインタビュイーに必ずお届けすることなど)

③のインタビュー計画は授業2回分にわたって発表を行った。実際にインタビューを行うグループ単位に、誰に対して、何について(質問内容を具体的にブレイクダウンしてみる)、どうやって聞くのか、どう記録するのかをA4で1枚にまとめて発表し、学生相互でアドバイスする方法をとった。この時点のインタビュイー候補者は、6グループ中、名古屋大学内の人物(教員など)が3人、学外者が3人であったが、学外者の中にはとうてい実現しそうな職業の人や芸能人の名前が挙がっており、実現のための方法論もいまだ稚拙であり、担当教員としては果たして学期内に授業を完結できるのかどうか冷や汗の連続であった。

インタビュー計画をみて実現可能であると判断したグループについては、筆者が作成・捺印した依頼状(図3参照)をその場で手渡し、インタビューの実行を許可した。依頼状には、このインタビューを授業の一環として行っていること、ボランティアとしてインタビューを引き受けてほしいこと、最終的な責任者は担当教員である筆者にあることを記した。

様	2003年12月 日
インタビューのお願い	
<p>はじめまして。私、名古屋大学高等教育研究センターの助教授をしている近田政博(ちかだ まさひろ)と申します。現在私は名大で大学1年生用に「基礎セミナー」という授業を担当しております。この授業は「大学における学習方法」についての基礎を新入生に学ばせることを目的としています。</p> <p>このたび後期(10月~1月)の授業では、「他人について調べて書く」をテーマに、二人一組でインタビューの実践をさせる予定です。インタビューのテーマは、下記の2点です。</p> <ul style="list-style-type: none">・なぜ今の職業を選んだのか。・現在から振り返って、大学時代に学んでおくべきことは何か。 <p>この授業のねらいは、大学親友製に大人の第三者(友人ではない、という意味です)に対して、特定の主題に基づいて質問を行い、相手の話を聞き、記録するという試みを体験させることにあります。これは、狭い友人関係を越えたところで他社との関係をどう構築していくかというコミュニケーションの基礎学習でもあり同時に、学生に将来への方向性について考えさせる一種のキャリア・プランニングにもなりうると考えます。</p> <p>学生にとってはこういう経験はおそらく初めてのことで、いろいろ失敗はあるかと思いますが、何とぞご協力いただけないでしょうか。なぜあなた様をインタビュー対象に選んだのかについては、学生から説明させるようにいたします。その他、下記の点についてお願いいたします。</p> <ul style="list-style-type: none">・インタビューの細かな項目については、学生からご説明申し上げます。・残念ながら、インタビューの謝礼を出すことができません。ボランティアとして引き受けて頂けないでしょうか。・何か失礼がありましたら、その場で遠慮なく注意して下さい。・後ほどインタビューの記録ができあがりましたら、お届けします。・インタビュー項目以外にも、何か学生にアドバイスがありましたら、お願いします。 <p>何かご不明な点、ご質問等ありましたら、お手数ですが下記までご一報ください。</p> <p style="text-align: right;">近田政博(名古屋大学高等教育研究センター・助教授) 電話：052-789-5692(研究室直通) chikada@cshe.nagoya-u.ac.jp</p>	

図3 インタビューの依頼状

4. 授業の成果

本授業の成果については、インタビュー記録、学生の自己評価、授業ポートフォリオの作成、学生による授業評価結果の4点から考察したい。

4.1 インタビュー記録

インタビューは冬休み前後に実施された。実際に引き受けてくださったのは、名古屋大学総長(当時、男性)、経済学研究科教授(男性)、文学研究科助教授(男性)、前愛知県知事(男性)、外国語学校教師(女性)、私立探偵

(女性)の各氏であった。名大関係者と学外の人、男性と女性という点ではバランスがとれていたように思う。いずれのインタビュー記録内容にも苦心の跡がみられるが、著作権(インタビューを受けた側とインタビューした側の両方にとって)に関わるのでここではすべてをつまびらかにすることは控えたい。そこで、受講生から最も高い評価を得たインタビュー事例を一つだけ紹介したい。

それは、前名古屋大学総長に行ったインタビューであった(公人ということで内容を紹介することを許されたい)。事前に筆者から秘書室を通して取材を申し込んでいたが、任期満了直前の超多忙な時期ということもあり、実現するのは難しいのではないかと予想していた。ところが、昼食時間がとれたから、弁当を食べながらインタビューを受けてもいいという返事が秘書室から返ってきた。そこで、前総長(土木工学者でもある)の著作や記事などを丹念にリサーチしてきた法学部K君と経済学部H君を総長室に案内すると、前総長はすでに昼食を終え、我々の到着を待っておられた。学生がインタビューする間、筆者は秘書室で待機していたが、30分もしないうちに総長は部屋から出てきて、「これから出かけるところがあるが、まだ話は終わっていない。二人を借りるが構わないか」と筆者に尋ねられた。二人の学生はそのまま公用車に「拉致」され、私は一人で研究室に戻った。ほどなくして二人の学生も戻ってきたが、彼らによると、前総長は車中でも熱弁をふるい、ご自分が目的地で降りる際に、二人を大学に送り届けるように計らってくれたという。かくして彼らは総長公用車の後部座席を独占して大学に戻ってきた。熱弁家かつ学生好きで知られた前総長らしいエピソードである。

年が明けてしばらく経った頃、総長室から一通の学内便が送られてくるという後日談もあった。学生が後日届けたインタビュー記録には、明らかなミスや勘違いしていると思われる箇所に総長本人の朱がしっかり入れられていた。これを私から受け取った学生は心底うれしそうであった。

この体験が功を奏したのか、彼らは当日の熱のこもったやりとりを彷彿とさせる緻密なインタビュー記録を作成し、発表した。この中で、前総長は自分が研究者を志した動機について、「物凄く貧しかったから、電気が各家に全部いくように、あるいは道路がうまく走れるように、鉄道ができるようにと非常に志を持って土木へ進んだわけなんですよ⁷⁾と述べている。また、今から振り返って大学時代に学んでおくべきことについては、(先端科学は大事だけれども)やはり広く言う文化、あるいはもっとやさ

しい言葉で言えば、わけが分かりにくいだろうけど教養というものかね。そういうようなものをしっかり学んで、もうちょっとやっておけば良かったと思いますよ⁸⁾とのコメントを引き出している。理系出身の前総長としては文系学生に対するアドバイスを配慮してくれたのかもしれない。

4.2 学生の自己評価

期末レポートでは、こうしたインタビュー記録作成のプロセスを受講者に自己評価してもらった。前総長をインタビューしたK君とH君は、「インタビューの下調べに時間を費やして全く損はなかった。本番で比較的落ち着いて質問することができた」と述べている。資料を精読した結果、前総長がよく用いるキーワードを事前に知ることができ、話の展開を読むことができたとコメントしている。それでもなお、最初の質問の聞き方に失敗し、前総長の話が止まらなくなり、当初予定していた時間の半分かくらいがあっという間に過ぎてしまったという。そしてインタビュー記録の難しさは、「先生(筆者注：前総長)の特長を落とさずに、いかに論理的に書けるかということ」であったと述べている。K君は次のようにインタビューを総括している。「インタビューの経験自体も良いものでしたが、先生(筆者注：前総長)の『自分の専門分野以外のことも、多少なりとも知らなくてはいけない(文理融合論)』という言葉に何より感銘を受けました。『大学で何を学んだらいいか』という自分自身の迷いに、一つの答えを見せてくれたような気がします。」

このほかの受講生からは次のような自己評価コメントが得られた。

- ・「世間にはいろいろな人がいるんだなあと感じた。」
- ・「相手には相手の生活の流れがあるので、その中にどうやってインタビューを割り込ませられるか、価値があると思わせられるか。」
- ・「『二十歳のころ』を読んで、『もっとこうすべきだ』と思ったことも、実際にインタビューしてみたり、記録してみると、なかなか思い通りにいかないものだ実感した。」
- ・「実際にインタビューをする時には、何とも言えないワクワク感を楽しむことができた。」
- ・「相手の話を聞いて、大切なところを瞬時に読みとることは、実践してみると意外に難しい。」
- ・「この授業に対する取り組みは、他の授業と違ってすごく自発的であったような気がする。先生の話や、幾つかの教科書から、この取

4.4 学生による授業評価アンケート結果

本授業についての学生の評価は、筆者が名古屋大学で数年間担当してきた授業の中で最もよい結果が得られた(図5参照)。従来から基礎セミナーは他の科目と比較しても、健康・スポーツ科学科目とならんで学生の評価が最も高い科目の一つであるが、例年平均点をやや上回る程度であった筆者の授業としては異例の結果となった。とくに平均点との差が大きかったのは、「問4 成績評価の方法・基準についてわかりやすく説明されましたか」(近田3.8:平均3.0)「問5 シラバスどおりに授業が進められましたか」(近田3.9:平均3.1)「問10 教科書等の教材は適切でしたか」(近田3.8:平均3.1)などであった(図5参照)。これらは、詳細なシラバスを設計しておいたことの効果であろう。また、採用した教科書が授業本来の目標に沿っていたと受講生が評価したことを示している。

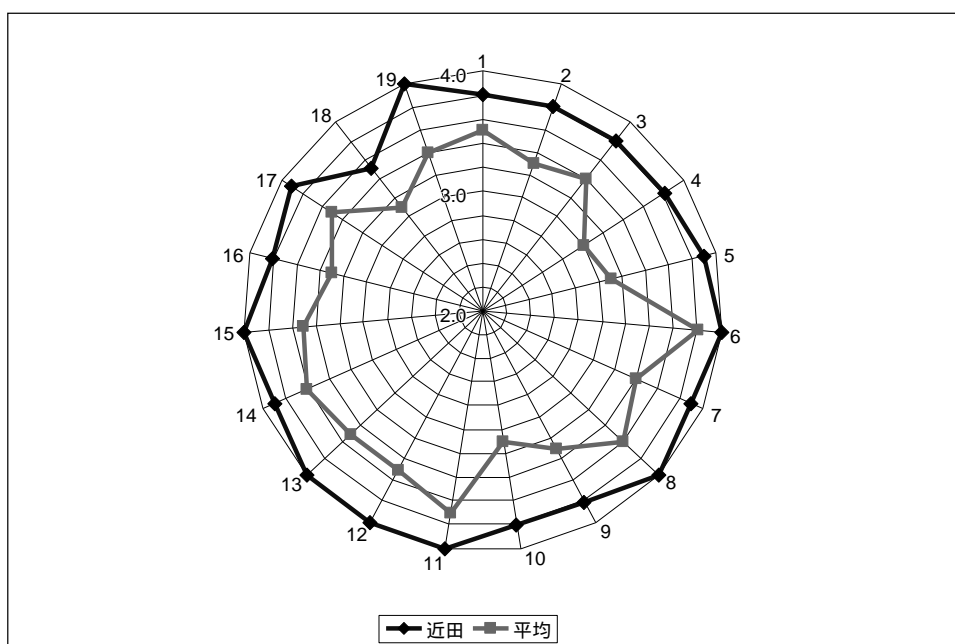


図5 学生による授業評価アンケートの結果(共通設問のみ)

同時に、セミナーとしての性質上、特に重要と思われる設問群「問6 質問したり意見を述べたりする機会がありましたか」(近田4.0:平均3.8)「問11 授業時間外に学習する課題が与えられましたか」(近田4.0:平均3.7)でも、平均以上の評価が得られた。

基礎セミナーの科目別設間をみると、「問24 この一学期を通して、テーマの資料調査やまとめを行うために、授業時間を除いてどのくらいの時間を使いましたか」では、①延べ1週間以上:6人、②延べ1週間以内:

5人、③3日以内：1人となっており、半数の学生が延べ1週間以上の課外学習を行ったという結果が得られた。「問26 この一学期を通して、基礎セミナーで発言しましたか」では、毎回1回以上発言をしたと回答した学生は12人中10人に上っている。「問27 基礎セミナーを受講して自分がどの様になったと思いますか」については、③一つの課題を他の学生と協力して成し遂げることができるようになったとの回答が半数を占めた。

5. なぜ学生の満足度が高くなったのか

なぜ本授業はこれまでの筆者の授業と比較して、あるいは同時期に開講された他の基礎セミナーと比較して、期せずして学生の高い評価を得ることができたのか。今になって振り返ってみれば、いくつかの要因を指摘することができるように思う。

第一は、新入生のニーズに適したテーマ設定である。前期の自己プレゼンテーション、後期の他者とのコミュニケーションをいうテーマは、大学という新しい環境の中で人間関係を一から作ろうとしている新入生のニーズにマッチしたと考えられる⁹⁾。

実際にほぼ全員の学生が第一志望であったことは、学生がこの授業に少なからぬ期待を抱いていたことを示している。

第二は、インタビューの実践という体験型の課題を課したことである。授業は教室の中だけでは完結せず、インタビューの選定からその人についての情報収集、質問内容・方法の吟味、記録・発表の方法などについて、一つずつ自分たち自身の手によって主体的に検討していかなければならない。また、高校時代の友人、部活動・サークルの仲間や先輩など、年齢や環境などの属性が自分に類似した数人の仲間との人間関係に限定されやすい大学新入生にとって、明確な目的を持って年長者に話を聞くという体験はほとんど初めてのことであり、それ自体が新鮮だったということもあるだろう。さらには、「他人の人生を聞き出す」ということがどれほどの事前準備と細心の注意、人間的思いやりが不可欠であるかということを経験できたことが彼らなりの充実感につながっていったのではないかと思われる。

第三は、課題を達成するのに適した教科書を選んだことである。『二十歳のころ』を教科書に選んだことは、二つの点で有効であったと思われる。一つは、同書のインタビュー記録をレビューすることによって、インタ

ビューにはどのような方法論・技法があるのか、どのようなインタビューがグッド・プラクティスなのか(自分たちが目指したい事例)、あるいは、どのような失敗に陥りやすいかなどについて、仲間とディスカッションしながら具体的に学ぶことができたことである。もう一つは、各界の多くの著名人が実際にどのような青春時代を送っていたのかという、インタビューのコンテンツ部分のおもしろさを味わうことができたことである。つまりは、方法論の習得とコンテンツ鑑賞の両面において、同書は格好の題材になったと思われる。

第四は、課題達成のプロセスと成果を全員で共有したことである。インタビュー計画づくり、実施、記録の作成はグループごとの作業であったが、必ず全員場で発表する機会を設けたことにより、他のグループの進捗状況や発表内容が大いに刺激になったようである¹⁰⁾。本授業では教師(筆者)やTAは 트레이ナー(訓練する人)というよりも、ファシリテーター(学生が学ぶ手助けをする存在)としての役割が大きかった。受講生にはお互いを励まし、評価し、互いに学び合うことを奨励した。

しかしながら、授業として不十分だった点もいくつか思い当たる。

第一に、TAに活躍の機会を十分に提供できなかった。前期の授業ではTA自身の歩んできた人生をプレゼンテーションしてもらうことにより、受講生のモチベーションを高めようとしたが、後期の授業ではそうした機会はほとんどなかった。TAの主な仕事は、授業の進め方についての意見交換と『二十歳のころ』レビューの司会を除けば、「ゴーイングシラバス」の利用メンテナンス、資料の配布、コンパの手配など、どちらかといえば作業的な部分が多かった。教師としてTA自身の授業参加に対するモチベーションを高めることができたかといえば、十分ではなかったと言わざるをえない。授業評価アンケートの「問13 総合的にみてTAのサポートに満足しましたか」では学生全員から「満足した」との回答が得られたが、教師からみればこれはやや甘い評価ではないかと自戒している。

もう一つは、成績評価の上での形成的評価が十分でなかったことである。学生自身の学習到達度について尋ねた「問18 あなたはシラバスにある学習の目標を達成できましたか」では、近田3.5：平均3.1との結果が得られた。平均以上の得点ではあるが、他の質問項目と比較すると低いことがわかる。つまり、授業内容には満足しているが、自分自身の学習内容にはあまり満足できるものではなかったと考えている学生が存在していることを示している。振り返ってみれば、学習到達度が十分でなかったと学生が考

えている原因の一つは、インタビュー計画の不十分さにあるように思われる。筆者の判断ミスは、このインタビュー計画の発表を成績評価の対象に含めなかったがために、グループによって水準の差が大きくなってしまったことである。形成的評価を重視するのであれば、当然ながらインタビューに至るプロセスである計画立案も評価の対象とすべきであったろう。



図6 最後の授業での記念撮影

6 . おわりに - 体験型学習に求められるもの

上記の諸要因の中で特に重要だと思うのは、「体験型の課題に全員で主体的に取り組む」という方法論である。こうした知的作業を通して、大学生としての意識形成、仲間づくり、大学に対するコミットメント(自分の居場所探し)を促す効果が期待できる。実際に日本でもいくつかの大学ですでに体験型のオリエンテーションが導入されている(特に比較的小規模の私立大学ではさかんである)。

体験型の課題を実行するスタイルの授業は、教育学および教育心理学の分野において「経験学習(experiential learning)として概念化されている。経験学習を提唱したKolb(1984)によれば、学習とは「成果というよりもむしろ過程である」「経験に根ざした継続的な過程である」「世界への全体的な適応の過程である」。すなわち、「学習とはさまざまな経験を通して知識が生成されていく過程である」と定義されている¹¹⁾。こうした考え方は、学習者の態度形成や学生の参加・協同を重視する本基礎セミナーの趣旨に基本的に沿うものであると思われる。

経験学習で言うところの「経験」とは必ずしも屋外での活動(たとえばフィールドワークなど)に限定されない。座学で受動的に知識を吸収していく伝統的な学習方法との対比において、学習者が主体的に課題に取り組み、何かを発見していく過程はすべて「経験」と位置づけられている。Kolbが提唱した経験学習のモデルは、①体験(concrete experience) ②省察(reflective observation) ③概念化(abstract conceptualization) ④実践化(active experimentation)というプロセスである¹²⁾。つまり、体験とその概念化という作業を循環的かつ弁証法的に繰り返す過程の中で学習目標が達成されるという考え方である。ここでいう省察とは体験による効果や影響を把握することであり、概念化とは体験から何を得たのかを概念化・理論化することを指す。

表1 本基礎セミナーの学習プロセス(Kolbの経験学習モデルとの対比において)

Kolbの経験学習モデル	本授業の学習プロセス	具体的な活動内容
④ 実践化	① 学習目標の共有化、課題の認識	シラバスを読む、授業目標を知る、課題を知る、グループを作る
④ 実践化	② 課題を達成するための方法を学習	『二十歳のころ』レビュー、インタビュー方法論についての学習
① 体験	③ 体験	インタビューの計画、実施、記録作成、発表
② 省察 体験の効果・影響の把握	④ 反省	インタビュー発表、相互評価
③ 概念化 体験から得たものを理論化	⑤ 目標への振り返り	授業目標に対する取り組み方の自己検証

ちなみに、本基礎セミナーにおける学習のプロセスをまとめると表1のようになる。これとKolbのモデルを対比したところ、ある相異点に気がついた。それは、Kolbの言う「概念化」の作業が筆者の授業ではあまり行われなかったことである。本来、自分たちの行った体験を概念化・抽象化するためには、依拠するモデルや理論が必要であり、これまで行ってきた体験はこうしたモデルなり理論にアプローチし、理解するための手段であったことに受講者が気づくことが重要である。本授業で筆者が気づいてほしかったことは、「社会においてどのようにしたら信頼できる人間関係を築くことができるか」というテーマであった。しかしながら、本授業はこのテーマにアプローチするための理論モデルを提示したわけではなかつ

た(インタビューの方法論やティップスは提示したが、理論枠組みを示したわけではない)。大学の授業である以上、たとえ新生向けの導入科目であっても、むしろそれだからこそ、理論と実践の往復を通して、学問には抽象化と具体化の二つのアプローチがあることを学生に学んでもらう努力が必要であろう。

体験型基礎セミナーにおいて重要なことは、体験を楽しむことと同時に、体験を通じて何を学ぶことができるのか、そこにアプローチするための理論モデルを、教師が意識的に準備しておくことである。こうした授業事例を普及・蓄積することが、新生が大学での学習に適応する上での重要な鍵になると思われる。

注

- 1) いわゆる教育目標の分類体系(タキソノミー)として知られる。訳語は梶田 叡一(1994)『教育における評価の理論Ⅱ 学校学習とブルーム理論』金子書房、に基づく。おもに認知的領域には知識の習得・理解、情意的領域には興味、態度、価値観、判断力、適応性など、精神運動的領域には各種技能や運動技能が該当する。
- 2) <http://gs.cshe.nagoya-u.ac.jp/>
- 3) 立花隆 + 東京大学教養学部立花隆ゼミ(1998)『二十歳のころ』新潮社
- 4) 同上書、15頁
- 5) 同上書、34頁
- 6) ブルームらは形成的評価について「カリキュラム作成、教授、学習の3つの過程の、あらゆる改善のために用いられる組織的な評価である」と位置づけている。総括的評価が学習成果の測定を目的としているのに対し、形成的評価では学習のみならず教育する側のプロセスも同時に評価し、そこから得られた結果を両者の改善に活用することが求められる。B.S.ブルーム他(1973)『教育評価法ハンドブック - 強化学習の形成的評価と総括的評価 - 』(梶田 叡一、渋谷憲一、藤田恵璽訳)第一法規、162-190頁
- 7) 学生が発表したインタビュー記録より。
- 8) 同上
- 9) 平成12年度に名古屋大学共通教育委員会(当時)が実施した「名大生の学習ニーズに関するアンケート調査」結果によれば、「大学時代にどのような力を伸ばすことに興味があるか」という設問に対し、回答が多かったのは「外

国語を書く力・話す力」「外国語を読む力・聴く力」「人前で自分の考えを話す力」「適切な人間関係を築く力」「必要な情報を収集する力」「効果的に伝わる文書を書く力」などであった。反対に、「芸術を理解し鑑賞する力」「歴史的な文脈に沿って物事を決定する力」「文章を読んで理解する力」など、リベラルアーツ的素養に対する関心は低かった。

つまり、名古屋大学の学生は外国語の運用能力、自己表現能力、対人コミュニケーション能力、情報収集能力などの、いわゆる実践的なスキルに高い関心を持っており、基礎セミナーが他の科目に比べて学生の満足度が高いのは、初年次セミナーとしての科目性質上、他の科目に比べてこれらのニーズを満たしてくれる可能性が高いためであろう。名古屋大学共通教育委員会(2001)『カリキュラム改革に関する検討WG報告書 - 名古屋大学教養教育改革の課題 - 』、40頁

10) 期末レポートの学生記述より。

11) Kolb, D. A. (1984), *Experiential Learning: Experience as The Source of Learning and Development*, Prentice-Hall Inc., pp.25-38.

12) Ibid.